

ブロンテ姉妹とThundering Heights

白井義昭

Ⅰ 序

シャーロット・ブロンテ (Charlotte Brontë, 1816-1855) はCharlotte Brontëと表記されるが、最初から彼女の苗字がこの通りであったわけではない。ブロンテ一家の姓は、ブロンテ (Brontë) と定まる前は、Prunty, Brunty, Brunyee、あるいはアクセント記号のないBronteなどとさまざまに綴られて定まっていなかったのである。しかしシャーロットの父親であるパトリック (Patrick Brontë, 1777-1861) が、ケンブリッジ大学のセント・ジョンズ・コレッジ入学二日後に、入学受付係に正しい綴りはBrontëであると抗議し、訂正を求めたときから、現在の綴りに定まったとされている。一説には英雄ネルソン卿 (Horatio Nelson, 1758-1805) が1799年にブロンテ公爵に任ぜられたことにあやかって、このように改名したと伝えられている。このような経過を経て定まったBrontëという苗字であるが、シャーロットはこの苗字とギリシャ語との関連に注目し、非常に面白い言葉遊びをしたのであった。

シャーロットは1836年8月か9月に、エレン・ナッシー (Ellen Nussey) に次のような手紙を出している。手紙の差出人に注目していただきたい。Charles Thunderとなっているのだ。

To Ellen Nussey, [?August/September 1836] [Roe Head]

Tuesday afternoon

I am now at liberty to announce that to-morrow my Superior and their Serene Highnesses, the Ladies E & H. will shower the light of their glorious green apparel upon you, id est that they will come to Brook-royd.

I am thine

Charles Thunder¹

このCharles Thunderというペンネームについてシャーロットの書簡集編纂者のマーガレット・スミスは、

The first postscript is written in dark ink in an upright style no doubt intended to fit the masculine pseudonym—a private joke on CB’s part, since she used the initials ‘C.T.’ (for ‘Charles Townshend’) for some of her Anglian stories, such as ‘Passing Events,’ written in Apr. and June 1836. The Greek word ‘Brontë’ means ‘thunder’.²

という説明をしている。

さらにギヤスケル (Elizabeth C.S.Gaskell, 1810-65) もこの名称に関し、*The Life of Charlotte Brontë* で以下のように述べている。

About this time (=1840), to her more familiar correspondents, she occasionally calls herself “Charles Thunder,” making a kind of pseudonym for herself out of her Christian name, and the meaning of her Greek surname.³

ギヤスケルによれば、ギリシャ語でBrontëが “thunder” を意味していることをシャーロットは知っていて、それでセカンド・ネームをThunderにしたということである。ファースト・ネームをCharlesにしたのは、自分が女性であることを隠蔽するためであった。このことから明らかかなように、シャーロットはBrontëをthunderと結びつけて言葉遊びをしていたのである。

ちなみにMichael Carterという人物には、*Wuthering Heights* の真の作者がエミリではなく、シャーロットであることを明らかにしようとした *Charlotte Brontë’s Thunder: The Truth Behind the Brontë Genius*

¹ Margaret Smith, *The Letters of Charlotte Brontë*, Vol. 1, 1829-1847 (Oxford: Clarendon Press, 1995) 151.

² Smith, 151.

³ Elizabeth Gaskell, *The Life of Charlotte Brontë*, ed. Alan Shelston (Harmondsworth: Penguin Books, 1975) ch.9.

(Amazon: Boomer Publication, 2011) という書名の著書がある。

それではシャーロットをはじめとしてブロンテ姉妹は、彼女らの苗字と関係のある “thunder” をどのように捉えていたのか。そしてそれをどのような文学的効果をだすために彼女たちの作品の中で使用していたのだろうか。以下においてそのことを考察してみたい。なお、本論でいうブロンテ姉妹には、単にシャーロット、エミリー (Emily Brontë, 1818-48)、アン (Anne Brontë, 1820-49) の三姉妹だけでなく、彼女たちの父親であるパトリックと唯一の男兄弟であるブランウェル (Branwell Brontë, 1817-48) をも含めるものとする。

II 伝統的な “thunder” 観

一般的に “thunder” は「至高 (天空の) 神の声」と見なされる。“thunderbolt” (雷鳴を伴う電光、雷電) は「至高 (天空の) 神の武器や鎧」を、“lightning” (稲妻) は「至高 (天空の) 神の力または怒り」の表れで神の武器を意味する。聖書で最初に “thunder” が言及されるのは「出エジプト記」9章においてである。エジプト王、ファラオは民に対して高ぶり、彼らをエジプトから去らせようとしな

As yet exaltest thou thyself against my people, that thou wilt not let them go? [Exodus 9:17]

それゆえに主は、明日、雹を降らせるということを彼に告げよとモーセに仰せになった。

Behold, tomorrow about this time I will cause it to rain a very grievous hail, such as hath not been in Egypt since the foundation thereof even until now. [Exodus 9:18]

さらに主はモーセに

Stretch forth thine hand toward heaven, that there may be hail in all the land of Egypt, upon man, and upon beast, and upon every herb of the field, throughout the land of Egypt.

[Exodus 9:22]

と仰せになった。そこでモーセは主が命じられたように手を天に向かって差しのべる。すると “the Lord sent thunder and hail, and the fire ran along upon the ground” [Exodus 9: 23]となるのである。

また、「サミュエル記上」12章17節には

Is it not wheat harvest to day? I will call unto the LORD, and he shall send thunder and rain, that ye may perceive and see that your wickedness is great, which you have done in the sight of the LORD, in asking you a king.

[1 Samuel 12:17]

とあり、“thunder”は犯した悪を知らしめる神の怒りの表れとなっている。

III パトリックの “thunder” 観

(1) パトリックの場合

ブロンテ姉妹の父親であるパトリックは息子のブランウェルにギリシャ語とラテン語を教えたほどであるから、シャーロットのBrontë=thunderの言葉遊びは知っていたかもしれない。しかし、彼が知っていたか否かはともかくとして、シャーロットがエレンにさきほどの手紙を出すはるか以前からパトリックは “thunder” 関連語を彼の作品の中で多用している。なお、本稿でいう “thunder” 関連語には、名詞、動詞としての “thunder”、動詞のing形や、過去形、過去分詞形も含むものとする。彼が具体的に使用しているのは以下の通りである⁴。

Cottage Poems (1811) では42か所、*Rural Minstrel: a Miscellany of Descriptive Poems* (1813) と *Cottage in the Wood, or the Art of Becoming Rich and Happy* (1815) でそれぞれ6か所、*The Maid of*

⁴ テキストは、Patrick Brontë, *Patrick Brontë: His Collected Works and Life*, ed. J. Horsfall Turner (Bingley: T. Harrison & Sons, 1898).

Killarney; or, Albion and Flora: A Modern Tale; in Which are Interwoven some Cursory Remarks on Religion and Politic (1818) で3か所、“A Sermon Preached in the Church of Haworth on Sunday, the 12th of September, 1824, in Reference to an Earthquake and extraordinary Eruption of Mud and Water” で6か所、この説教における天災地変を詩にした “The Phenomenon or, An Account in Verse of the Extraordinary Disruption of a Bog which took place in the Moors of Haworth, on the 12th Day of September 1824: Intended as a Reward Book for the Higher Classes in Sunday Schools” では7か所において散見される。

パトリックの “thunder” 観は非常に明白だ。キリスト教的な「神」と結びつけられた「至高（天空の）神の声」、特に「神の警告の声」、 「怒りの表れ」なのである。たとえば数量的に一番多く “thunder” 関連語を用いている *Cottage Poems* 中の “Epistle to a Young Clergyman” を取り上げてみよう。その9連目は

Portray, how God in thunder spoke
His fiery Law, whilst curling smoke,
In terror fierce, from Sinai broke,
Midst raging flame!
Then, Jesu’s milder blood invoke,
And preach his name.

（“Epistle to a Young Clergyman,” ll.49-54）

である。神は “thunder” で “His fiery Law” を語り、警告を放ったのである。また散文と詩で構成される *Cottage in the Wood* では、ウィリアム・バウワー(William Bower)という財産家の紳士 (“a gentleman of considerable fortune”) (p.110)がメアリー (Mary) という女性によって生き方を変えられ、まじめなクリスチャンとして生まれ変わるのが描かれているのだが、放蕩にふけたあとで悪友とともに家路を急ぐウィリ

アムたちを “a furious temper of wind, rain, and thunder” (*Cottage in the Wood*, p.116) が襲う。その結果、稲妻が近くのオークにおちる (“In consequence of the lightning striking an oak that grew close by, their horses took fright and threw them.”)。

この描写はシャーロットの *Jane Eyre* においてロチェスター (Rochester) が初めてジェイン (Jane) の前に姿をあらわしたときに、彼が落馬したことと、ジェインとロチェスターが結婚を約束した直後にホース・チェストナットが落雷にあって真っ二つに裂けたことの二つを合わせたようである。なお、このことについては後で詳しく述べることにする。そうしたことがあったが、ウィリアムと悪友たちは、神の加護によって、負傷や怪我をするということを免れる。彼らはしばらくのあいだ茫然自失するものの、そのようにオークが裂け、馬が驚き、そのためにかねらが落馬したということが神の仕業であることをすぐに忘れてしまい、下卑た歌を歌い、冒瀆的な話をし始める。悪友たちは家へ帰っていく。しかし、一人ウィリアムだけは、悪友たちと行動を共にすることができず、その場にどまり、考えこむのであった。他方、家路をたどっていた悪友たちは、追剥の待ち伏せを受け、背後から撃たれる。ウィリアムは、これら一連の出来事がすべて神の御業であることを悟り、悔い改めて反省し、メアリーと結婚し、彼女と幸せに暮らすのであった。まさしくサミュエル・リチャードソン (Samuel Richardson, 1689-1761) の *Pamela* に登場するミスターB (Mr. B) を思わせるようなストーリー展開である。パトリックは、さらに次のように付け加えるのを忘れない。

The holy, just, and strict condemning law,
In Sinai's thunder cloth'd, he loud proclaims;
The fatal sin original, is then
Expos'd to the red bolts of angry heaven. (p.122)

“thunder” は神の声であり、この神の声によって人の罪は暴かれるのである。

こうした“thunder”観をより具体的に提示したのが“A Sermon Preached in the Church of Haworth on Sunday, the 12th of September, 1824, in Reference to an Earthquake and extraordinary Eruption of Mud and Water”であり、それを詩の形で表現した“The Phenomenon or, An Account in Verse of the Extraordinary Disruption of a Bog which took place in the Moors of Haworth, on the 12th Day of September 1824: Intended as a Reward Book for the Higher Classes in Sunday Schools”である。“thunder”は稲妻(lightning)と一緒に用いられことが多く、パトリックにおいても例外でない。彼は、“A Sermon”で説教を始めるにあたり、まず「詩篇」97章4－5節の

His lightnings enlightened the world; the earth saw, and trembled.

The hills melted like wax at the presence of the Lord, at the presence of the Lord of the whole earth.

を引用する。1824年にハワースの荒野を襲ったこの天災地変は

the warning voice of Providence, that lately spoke to them in thunder, and seemed, even to give a tongue and utterance to every chasm that yawned around them.

(“A Sermon,” p.217)

であった。さらに詩の形を取った“The Phenomenon”に付した序言でパトリックは、“the grand First Cause of this, and every other phenomenon” (“The Phenomenon,” p.208) が“God”で、神のお使いになる道具が“the elements”すなわち四元で、神はこれらの「地・水・火・風」、そこには当然“thunder”が入るが、それらを用いて“to execute his various purposes of infinite justice or mercy”するのだ、と説く。このようにして、パトリックにとって、“thunder”は「至高(天空の)神の声」、「警告の声」、「怒りの表れ」なのである。

(2) シャーロット の *Jane Eyre* の場合

パトリックの「神の声」、人の罪をあばき、それを明らかにし、人に警告を与え、人を罰する「神の力」という“thunder”観が *Jane Eyre* に存在することに先ほど触れた。*Jane Eyre* では“thunder”が頻繁に轟いているように感じられるかもしれない。しかし、実際に姿を見せるのは、意外にも少なく、わずかに第2巻の第8章と10章においてだけである。しかし、“thunder”の兆しはすでに第2巻第5章において存在していたのであった。

この第2巻第5章では、ミスター・メイソン (Mr. Mason) (彼はロチェスターが屋根裏部屋に隠していた彼の妻バーサ・メイソン [Bertha Mason] の兄) がロチェスターの屋敷を訪問し、そこで一晩を過ごす。ところが宿泊中にメイソンが何者かに襲われて、ひどい怪我をするという奇怪な事件が発生する。このときの加害者は、屋根裏部屋に幽閉されているロチェスターの妻バーサであることがのちに判明するのだが、この段階ではそのことは伏せられている。メイソンの名を耳にしたときのロチェスターの反応にジェインは

Why had the mere name of this unresisting individual—whom his word now sufficed to control like a child—fallen on him, a few hours since, as a thunderbolt might fall on an oak?

(*Jane Eyre*, vol.2, ch.5) ⁵

と違和感をおぼえる。ここで“as a thunderbolt might fall on an oak”の表現に注目したい。“thunderbolt”は「暗闇を貫くロゴス、つまり天の啓示」⁶を意味するといわれるが、狂った妻を屋根裏部屋に隠しているロチェスターの闇が今、天の啓示を受けて明るみに出されたのである。

それでは第2巻第8章に入ろう。この章でジェインはロチェスターか

⁵ テキストは、Charlotte Brontë, *Jane Eyre*, ed. Jane Jack and Margaret Smith (1969; Oxford: Clarendon Press, 1975).

⁶ Ad De Vries, “thunderbolt,” *Dictionary of Symbols and Imagery* (Amsterdam: North-Holland, 1974).

ら求婚され、それを受け入れる。ロチェスターの愛を受け入れ、結婚を約束したジェインは、彼と別れ、寝室に入ろうとする。するとそのとき、大きな音を立てて風が吹き始め、稲妻が頻繁に光り、雨が滝のように降ってくるのであった。

loud as the wind blew, near and deep as the thunder crashed, fierce and frequent as the lightning gleamed, cataract-like as the rain fell during a storm of two hours' duration.

(*Jane Eyre*, vol.2, ch.8)

このように、この第2巻第8章では第2巻第5章を引き継ぐ形で“thunder”のイメージが継続して用いられている。ところがジェインは、“But joy soon effaced every other feeling. . . . I experienced no fear and little awe.” (*Jane Eyre*, vol.2, ch.8)とあるように、ロチェスターから求婚された喜びに浸り、こうした“thunder”という自然現象が持つ不吉な意味合いには全然気づかない。したがって、彼女が不安を覚えることはまったくない。ロチェスターが3度、ジェインの部屋のドアに来て、安否を確かめてくれただけで彼女は十分安心できたのだ。

Mr. Rochester came thrice to my door in the course of it, to ask if I was safe and tranquil: and that was comfort, that was strength for anything.

(*Jane Eyre*, vol.2, ch.8)

しかし、翌日になると、

little Adèle came running in to tell me that the great horse-chestnut at the bottom of the orchard had been struck by lightning in the night, and half of it split away.

(*Jane Eyre*, vol.2, ch.8)

とあるように、家庭教師をしている教え子のAdèleからホース・チェストナットが落雷を受け、真っ二つに裂けたと知らされるのであった。

第2巻第10章に入るとジェインとロチェスターの結婚式の日が近付い

ているなかで、ジェインは落雷で裂けたと告げられたホース・チェストナットを見に、果樹園へ出かけてみる。強い風が吹く日であった。“thunder”が鳴り響いていた。しかし、ジェインはそれにも関わらず、雷鳴におびえるどころか、むしろ

It was not without a certain wild pleasure I ran before the wind, delivering my trouble of mind to the measureless air-torrent thundering through space.

(*Jane Eyre*, vol.2, ch.10)

と“thunder”が鳴り響く風景を楽しんでいるように見える。ここには第2巻第8章で見られたのと同じような、ジェインの感受性の鈍感さが窺える。ジェインには“thunder”の象徴性がこの段階ではまだ理解できていないのである。しかし、現場に辿りついた彼女が目にしたのは、まぎれもなく神の怒りを受けて、無残にも落雷によって真っ二つに裂かれたホース・チェストナットなのであった。この木がジェインとロチェスターの関係の破局を予表していることは明白であろう。ジェインはこの木に、お前はもう緑豊かな葉を茂らせることも、お前の枝で小鳥がさえずることもないかもしれない、しかし“you are not desolate: each of you has a comrade to sympathize with him in his decay” (*Jane Eyre*, vol.2, ch.10) と言ってこの木を慰める。だが、そう言い終わるか終わらないかのうちに、雲間から、不吉さを感じさせる“blood-red”な月が一瞬顔をだし、すぐに雲間に姿を消した。一瞬、風が止む。ところが、遠くでは風が悲しげに泣き叫ぶように吹いており、その風音は荒々しく、メランコリックだ。ジェインは、この果樹園に来るまでは楽しい気分であったのだが、それがこの段階では一変し、ジェインは風音に堪えられず、足早に立ち去るのであった。

The wind fell, for a second, round Thornfield; but far away over wood and water, poured a wild, melancholy wail: it was sad to listen to, and I ran off again.

(Jane Eyre, vol.2, ch.10)

屋敷に戻ったジェインは、ロチェスターと語りあうこととなる。その語り合いの中でジェインは、二つの夢を見たと言い、その夢がどのようなものであったかをロチェスターに語りきかせる。一つ目の夢は、ロチェスターと別れる夢であり、二つ目の夢はジェインらしき女の子が高いところから落ちる夢であった。これら二つの夢がジェインのその後の不幸を予示するのは明白である。ここで重要なことは、こうした一連のことが “thunder” が轟いた状況下で生じたということである。まさしく “thunder” は「神の声」、人の罪をあばき、それを明らかにし、人に警告を与え、人を罰するものなのである。

IV ブランウェルの “thunder” 観

ブロンテ姉妹で唯一の男兄弟であるブランウェルも数多くの “thunder” 関連語を使用している。Victor A. Neufeldtが編集した *The Poems of Patrick Branwell Brontë*⁷ に限るだけでも94か所にわたって使用しており、数量的には父のパトリックを凌駕している。最も多く用いているのは「音量の大きさ」を表現するためである。数例あげることにして。たとえば “like thund’ring waterfalls” (No.27, “On the great Bay of the glass Town,” l.24), “The Trumpets blast the thundring drum” (No.48, “Thermopylae, PBB Book Ist,” l.59), “With hoofs of thunder, on he flies/Shaking his white mane to the skies” (No.54, “Misery,” ll.354-355)、それに “From the Thunder of the Battle / That has laid a thousand low/ From the cannons conquering rattle” (No.100, “From the Thunder of the Battle/ That has laid a thousand low/ From the cannons conquering rattle,” ll.1-3) など枚挙に暇がないほどである。

⁷ テキストは、Patrick Branwell Brontë, *The Poems of Patrick Branwell Brontë*, ed. Victor A. Neufeldt (New York & London: Garland, 1990).

これ以外の使用例に関しては、父パトリック同様、常套的な解釈、すなわち“thunder”を「神の声」、人の罪をあばき、それを明らかにし、人に警告を与え、人を罰するものと考えている点が見られる。しかし父とは異なり、その「強い力」が必ずしもキリスト教的な「神」と結びつけられるわけではない。たとえば1829年に書かれたとされる“The Song of the Ancient Briton’s On Leaving the Gneiland by UT”では祖国に自由がないことを詩中の人物は嘆き、その理由を

because that oer thee triumph
those tyrant’s of the air
who dwell in halls of thunder
& robes of lightning wear (ll.16-19)

と表現する。この場合の「天に存在する強い力」は“tyrants”であって、いわゆる「神」ではない。なお、ここでブランウエルの綴りについて一言付け加えると、彼のスペリングは正確でない場合がある。この詩でも“tyrant’s”と原稿では綴られているが、これは複数形と解釈すべきものであろう。話を戻そう。1829年執筆の“Ode to the Chief Genius Bany”では、“O thou mighty Genius/ Thou ruler of the world” (11.1-2) とBanyなる人物に呼びかけたあとで“Thou ridest on the Thunder cloud” (1.4) と続けるのである。1832年の“Ode on the Celebration of the Great African Games”ではBraniiという人物が

Awful Branii, gloomy giant,
Shaking o’er earth his blazing spear,
Brooding on blood with drear and vengeful soul
He sits enthroned in clouds to hear his thunders roll.
 (“Ode on the Celebration of the Great African Games,”
ll.112-115)

と描写される。このようにブランウエルの“thunder”は、彼の父親の抱いていたキリスト教的な「神」と必ずしも結びつかないのである。

ブランウェルの“thunder”は人の行動を「阻止」する機能を持つ。1830年執筆の“The Revenge,” Act the I, Scene the Iでは、海賊の船長であるWernerが国外追放にあり、海洋に出るが、

… lo the Heavens

with murky clouds surcharged muttered dull thunder

Big drops descended from the reddening sky.

(“The Revenge,” i.i, ll.46-8)

と“thunder”によってその行く手を阻まれるし、1836年の“My Ancient ship upon my Ancient sea”で始まる詩では、乗っていた船が

Lost and unnoticed—far away the roar

Of southern waters breaking to the wind

With restless thunder rolling still before

As the wild gale sweeps wilder on behind

(“My Ancient ship upon my Ancient sea,” ll.9-12)

と、やはり“thunder”によって同じ運命にあうのである。しかし、われわれがそこに宗教的な意味を見出すことはできない。

また“thunder”は強い復讐心をも表す。1830年作の“Revenge”には

O ye departed spirits fallen

By the tyrants bloody hand

Oer him fulminate your thunders

Desolate his land

Though now he sit[sic] upon a throne

(“The Revenge,” Act 1, Scene 1, ll.18-22)

とある。

いやそれだけにとどまらずブランウェルにとって“thunder”は

A storm there comes from Norways billowy shore

Even now I hear the distant thunders roar

On high sits death a black and gory form

On thee O King he wreaks the avenging storm

(“The Revenge,” ii.i, ll.69-72)

とあるように、死などの凶兆を予言するものであるし、1829年の
“Laussane: A Dramatic Poem” では

Like a dark thunder cloud. wich oer the plains

A while doth hover & then on them bursts

with forked lightnings scattering ruin round

(“Laussane: A Dramatic Poem,” Act 2, Scene 2, ll.6-8)

と「破滅」をもたらしもする。

父親のパトリックは 神の声、そしてそれは人の罪をあばき、それを明らかにし、人に警告を与え、人を罰するという、キリスト教的な思考に裏打ちされた伝統的な“thunder” 観を持っていたが、これらの例からわかるように息子のブランウェルはそうした伝統的な“thunder” 観からもう一歩進み出ると言うべきか、あるいはそこからはみ出ると言うべきか、そうしたものは直接結びつかない「死」や「破滅」をも“thunder” に読み込んだのである。これらの詩を書いた以降のことにはなるものの、ブランウェルは1835年には画家になろうと王立美術院に入学しようとロンドンまで行きながら、それを実行できず、父からもらった金をロンドンで使い果たしてハウスに戻る。1841年にはラデンデン・フット駅の事務長となったものの、翌年には不正経理の責任を取り、その職を辞す。さらには1843年になると妹のアンがガヴァネスとして勤めていたソープ・グリーン家のロビンソン家の家庭教師となるものの、ロビンソン夫人との不倫関係のために失職する。その後のブランウェルは失恋と失意のために酒とアヘンに溺れ、1848年に31歳の若さでこの世を去ることになる。ブランウェルの先ほどの“thunder” 観はこうした挫折に満ちたその後の彼の暗い人生を予示していたのかも知れないと思わせるほどである。

V エミリとシャーロット特有の“thunder”観

これまで伝統的な“thunder”観をパトリック、ブランウェル、それに*Jane Eyre*でシャーロットが抱いていたことをみてきた。ここではエミリとシャーロット特有の“thunder”観を考察することにした。エミリは*Wuthering Heights*の15か所で“thunder”を使用している⁸。しかし、その大部分は“thundered Heathcliff” (vol.1, ch.3), “he thundered” (vol.1, ch.11), “‘No!’ thundered Earnshaw” (vol.1, ch.13), “he thundered a command for me to go” (vol.2, ch.2), “‘There’s this to do,’ thundered Heathcliff” (vol.2, ch.3), “He let go, thundering one of his horrid curses” (vol.2, ch.10), “‘If Hareton does not turn you out of the room, I’ll strike him to hell,’ thundered Heathcliff” (vol.2, ch.19) と、ブランウェルの大方の使用例と同じく、*OED*の“To utter or publish in the way of terrible threatening, denunciation, or invective; also simply, to utter loudly, shout out, roar”⁹の意味での使用が大半である。しかし、そうした中であって第1巻第9章は“thunder”を別な意味合いで使用していて興味を引く。

この章でキャサリン (Catherine) はエドガー・リントン (Edgar Linton) と結婚するつもりであることを召使いのネリー・ディーン (Nelly Dean) に告げる。それを盗み聞きしたヒースクリフ (Heathcliff) は屋敷を飛び出す。このようなきわめて劇的な場面に“thunder”が登場する。ヒースクリフがいなくなったことに気付いたキャサリンは彼を探しに出かける。そのときの空は“the clouds appeared inclined to thunder” (*Wuthering Heights*, vol.1, ch.9) である。彼女は道路の一角に腰を下ろし、“the growling thunder, and the great drops” (*Wuthering Heights*, vol.1, ch.9) があるのにもかかわらず、そこから一向に動こうとしない。真夜中になっても嵐は止まず、むしろ激しさを

⁸ テキストは、Emily Brontë, *Wuthering Heights*, ed. Hilda Marsden and Ian Jack (Oxford: Clarendon Press, 1976).

⁹ *OED*, “thunder.”

ますばかりである。そのところの情景を見てみよう。

About midnight, while we still sat up, the storm came rattling over the Heights in full fury. There was a violent wind, as well as thunder, and either one or the other split a tree off at the corner of the building: a huge bough fell across the roof, and knocked down a portion of the east chimney-stack, sending a clatter of stones and soot into the kitchen-fire. We thought a bolt had fallen in the middle of us. (*Wuthering Heights*, vol.1, ch.9)

強風が吹き、雷鳴が聞こえる。ヒースクリフはそれから3年間、嵐が丘から完全に姿を消したのであった。ネリーは、そのことを“*Heathcliff had never been heard of since the evening of the thunder-storm*” (*Wuthering Heights*, vol.1, ch.9)と語る。

“thunder”が轟いて荒れ狂う夕方の嵐が丘は、ヒースクリフの心の苦しみ、それにヒースクリフを失って途方にくれたキャサリンの心情を代弁していると言えるだろう。ここで轟く“thunder”は、パトリックなどで確認した「神の声」、人の罪をあばき、それを明らかにし、人に警告を与え、人を罰する「天に存在する強い力」としての“thunder”ではない。また、ブランウェルの場合のように「死」や「破滅」を読み込んでもいない。それらとは異なるものである。ヴァージニア・ウルフ (Virginia Woolf, 1882-1941) は、*The Common Reader*の“‘Jane Eyre’ and ‘Wuthering Heights’”という章で、エミリとシャーロットの自然描写について触れている。ウルフはシャーロットの『ヴィレット』 (*Villette*) の最終章である第42章の中の“The skies hang full and dark—a wrack sails from the west; the clouds cast themselves into strange forms” (*Villette*, ch.42)¹⁰を引用しながら、*Villette*が嵐の描写で終わ

¹⁰ テキストは、Charlotte Brontë, *Villette*, ed. Herbert Rosengarten and Margaret Smith (Oxford: Clarendon Press, 1984).

っていることに触れて、次のように言う。

They (=Charlotte and Emily) seized those aspects of the earth which were most akin to what they themselves felt or imputed to their characters, and so their storms, their moors, their lovely spaces of summer weather are not ornaments applied to decorate a dull page or display the writer's powers of observations—they carry on the emotion and light up the meaning of the book.¹¹

シャーロットの *Villette* は、ヒロインのルーシー・スノウ (Lucy Snowe) が3年のあいだその帰国を待っていた婚約者ポール・エマニュエル (Paul Emanuel) が英国沿岸近くに來ながら、嵐のために彼の乗っていた船が難破し、彼が行方知らずになるところで物語が終わる。この嵐は、自然現象としての単なる嵐を描いたものではなく、そうした嵐によって愛する人を奪われたであろうルーシーの心の動揺を写しだすものなのである。同様にして、エミリが *Wuthering Heights* で描く “thunder” も、単なる自然の一現象ではない。それは彼女自身が感じた、あるいは登場人物たちが感じていると作者が考えた自然であったのだ。すなわち、ウルフのさきほどの言葉を待つまでもなく、ヒロインの心象風景なのである。このように *Villette* でシャーロットが、*Wuthering Heights* でエミリが描いた “thunder” は、神の声、そしてそれは人の罪をあばき、それを明らかにし、人に警告を与え、人を罰するという、父親のパトリックが抱いていた伝統的な “thunder” 観とは違う、彼女たち独自のものなのである。

VI シャーロット特有の “thunder” 観

これまでパトリックからはじめて息子のブランウェル、それにエミリが “thunder” をどのようにとらえてきたかを見てきた。パトリックと

¹¹ Virginia Woolf, *The Common Reader* (1925; Orlando: Harcourt, 1984) 159.

ブランウェル、それに *Jane Eyre* でシャーロットが伝統的な “thunder” 観を継承していること、エミリはそうした見方から離れ、己の心象風景を表現する手段として “thunder” を *Wuthering Heights* において彼女なりに使用していたのが知られた。シャーロットも *Villette* では、エミリと同様な取扱いをしていることが知られた。しかし、シャーロットの場合は、彼らとはさらに異なる “thunder” 観をも抱いているように思われる。それでは、最後に、そのことについて詳述していくことにしたい。

だがその前に、シャーロットの作品の中で “thunder” がプロットの進展とあまり関わっていないと思われる作品があることに触れなければならぬだろう。それは *Shirley*¹² である。この作品では “thunder” が14回使用されている。しかし、数が多い割に、その使用方法は “thundering mill” (vol.1, ch.7)、“thunderbolt of self-contempt” (vol.1, ch.7)、“much more like the first of a thunder-shower” (vol.1, ch.8)、“a sea thunders above you” (vol.2, ch.1)、“a herd of whales rushing through the livid and liquid thunder down from the frozen zone” (vol.2, ch.2)、“A growl more terrible than the bark, menacing as muttered thunder, succeeded” (vol.2, ch.4)、“Peter grew black as a thunder-cloud” (vol.2, ch.5)、“leader of the might of England; commander of her strength on the deep; hurler of her thunder over the flood” (vol.3, ch.3)、“instead of thundering home in a breakneck gallop” (vol.3, ch.7)、“thundering with the voice of His excellency” (vol.3, ch.14) というように大声、濃い色彩、速さを強調する、いわば比喩的表現として用いられているか、そうでない場合でも、“Did it thunder?” (vol.2, ch.1)、“In sultry weather, you have seen the sky threaten thunder day by day” (vol.2, ch.5)、“nor would Calder or Aire thundering in flood” (vol.2, ch.8)、“A pious Argive enters to make an early offering in the cool

¹² テキストは、Charlotte Brontë, *Shirley*, ed. Herbert Rosengarten and Margaret Smith (Oxford: Clarendon Press, 1979).

dawn of morning. There was thunder in the night; the bolt fell here” (vol.3, ch.6) という表現はあっても、それらはこの作品のプロットの展開とは直接関係のない、一般的な自然事象として取り扱われているにすぎない。*Shirley* はラダイト運動を取り扱う形で執筆をし始めたのだが、その方針が執筆の過程においてゆらぎはじめ、最終的には二組の男女の平凡な恋愛物語に終わった失敗作というのが今日の一般的な評価である。“thunder”の取り扱い方に、なんら工夫の跡が見られないことは、そうした創作上の欠陥とあるいは関係しているのかも知れない。

ついでに末の妹のアンの“thunder”観についてもここで触れておかなければならないであろう。アンの場合は、*Agnes Grey*と*The Tenant of Wildfell Hall*で“thunder”をそれぞれ3度しか登場させていない。*Agnes Grey*の冒頭の章では、アグネスの父が破産したことが “It came like a thunder-clap on us all that the vessel which contained our fortune had been wrecked” (*Agnes Grey*, ch.1)¹³と比喩的に表現される。*The Tenant of Wildfell Hall*でも3度の使用のうち2度とも “the thunders of applause” (*The Tenant of Wildfell Hall*, vol.2, ch.3)¹⁴, “I was thunderstruck” (*The Tenant of Wildfell Hall*, vol.2, ch.14) というように比喩的表現として使用されているだけである。もちろん実際の天候に触れた個所がないわけではなく、*Tenant*では “We shall have thunder showers before night, I imagine; and they are just in the midst of stacking my corn. Have you got yours all in yet?” (*The Tenant of Wildfell Hall*, vol.3, ch.9) という一文がある。しかし、これがその後プロットの進展と絡むことはない。アンの作品で唯一プロットと多少なりとも絡んでいると思われるのは*Agnes Grey*の第25章のところであろう。そこでは “a heavy and protracted thunder shower” (*Agnes Grey*, ch.25)

¹³ テキストは、Anne Brontë, *Agnes Grey*, ed. Hilda Marsden and Robert Inglesfield (Oxford: Clarendon Press, 1988).

¹⁴ テキストは、Anne Brontë, *The Tenant of Wildfell Hall*, ed. Herbert Rosengarten (Oxford: Clarendon Press, 1992).

のためにアグネスに会いに出かけられなかったウェストン氏 (Mr. Weston) だったが、その嵐も止んで、外出が可能になり、その彼の来訪を喜ぶアグネスの様子が描かれる。この嵐は、過ぎ去ってしまえば良い天候をもたらしてくれて、したがって “The thunder-shower had certainly had a most beneficial effect upon the weather, and the evening was most delightful” (*Agnes Grey*, ch.25)と表現されることになる。アンの作品ではこれ以外の使用例がみられない。こうしたことを考えると、彼女の作品では、最後にあげた「台風一過の好天」をもたらす程度のものとしてのみ軽く取り扱われていたといえるだろう。

では、本論のシャーロット特有の “thunder” 観に戻ろう。まず取り上げるのは *The Professor* である。この作品では、“thunder” が13か所で “確認された Shirley とは対照的に、“thunder” が使用されているのは第19章においてのみで、しかもわずか3か所においてである。しかしこのように使用数が少ないながら、この作品にはシャーロット独自の “thunder” 観がうかがえて、きわめて興味深い。主人公であるウィリアム・クリムズワース (William Crimsworth) は、ベルギーのブリュッセルで英語とラテン語の教師として、ロイター女史 (Mdlle. Reuter) の経営する女子寄宿学校の教師となっている。彼はそこの裁縫の教師でありながら、彼から英語を学んでいたフランシス・エヴァンズ・アンリ (Frances Evans Henri) を愛するようになる。しかし彼女は、勤務先から解雇されて、その後行方知らずとなっており、それでウィリアムが彼女を探していたのであった。その彼女と再会する次第を語っているのがこの第19章である。4週間フランシスを探し求めていたものの、彼女はなかなか見つからない。蒸し暑くて曇ったある日の午後、ウィリアムは、スウィフト (Jonathan Swift, 1667-1745) の *Gulliver's Travels* のプロブディングナグの菜園のように肥沃で、かつ地平線まで広々と延びた耕地に行き着く。

from a dusk green, distance changed them [=tilled grounds] to

a sullen blue, and confused their tints with those of the livid and thunderous-looking sky.

(*The Professor*, ch.19) ¹⁵

そのまま歩き続けると “The protestant Cemetery, outside the gate of Louvain” (*The Professor*, ch.19) に辿りついた。すると二週間前に亡くなった叔母の墓前に額づいているフランシスの姿を見つける。ここで、そこに至る直前の風景描写に注目したい。

where the flowers, as languid as fair, waited listless for night-dew or thunder-shower, where the tombs and those they hid, lay impassible to sun or shadow, to rain or drought.

(*The Professor*, ch.19)

と “thunder-shower” の到来が予想されている。この描写の後でウィリアムは、墓前にいるフランシスを見つける。その後、ウィリアムは、フランシスとともにこの墓地を出て、彼女と肩を並べて歩き、彼女が退職させられるにいたった経過を聞く。そうしているうちに

Any comments I might have intended to make on my pupil's communication, were checked by the splashing of large rain-drops on our faces and on the path, and by the muttering of a distant, but coming storm.

(*The Professor*, ch.19)

と雷がせまってきているのである。まもなく “large drops” (*The Professor*, ch.19) が降ってきたと思ったら、“we should not have had a dry thread on us.” (*The Professor*, ch.19) となる。そうした中二人はフランシスの家へと急ぐ。彼女の家戸口にたどりつくやいなや、“the clouds, severing with loud peal and shattered cataract of lightning, emptied their livid folds in a torrent heavy, prone and broad.” (*The*

¹⁵ テキストは、Charlotte Brontë, *The Professor*, ed. Margaret Smith and Herbert Rosengarten (Oxford: Clarendon Press, 1987).

Professor, ch.19) となるのである。フランシスはウィリアムに “Come in! Come in!” (*The Professor*, ch.19) と言い、彼を自宅に入れる。フランシスは手際よくお茶を用意し、ウィリアムを温かくもてなす。彼女の家はウィリアムにとって “Like the England of a hundred years ago” (*The Professor*, ch.19) に感じられるほどきわめて寛げる空間であった。“the rain yet falls heavily, and will probably detain me half an hour longer.” (*The Professor*, ch.19) とウィリアムは言い、雨が降りやむまでのあいだ、フランシスにミルトン (John Milton, 1608-74) の *Paradise Lost* を朗読させるなどして、楽しい時間を過ごす。しかし雨も止み、ウィリアムはフランシスの家を退出しなければならなくなる。

“and now the rain is ceasing, and I must soon go.” For indeed, at that moment, looking towards the window, I saw it all blue; the thunder-clouds were broken and scattered, and the setting August sun sent a gleam like the reflection of rubies through the lattice. I got up; I drew on my gloves. “Now the rain is ceasing and I must go.”

(*The Professor*, ch.19)

ここで重要なことは “thunder” および “thunder-shower” が伝統的な “thunder” 観によるような、神の声でなく、そして人の罪をあばき、それを明らかにし、警告を発するようなものではなく、要するに二人の関係を壊すようなものではなく、むしろ反対に、二人を近付けるということである。二人の絆を強くするということである。

似たような “thunder” の効果、これを「絆効果」と本論では称することにするが、これは *Villette* の第15章、第16章、それに第34章においても認められる。*Villette* では19か所にわたり “thunder” が用いられているが、その多くは以下のように比喻として用いられていて、作品のプロットと直接関係しない。

“like small beer in thunder” (ch.6), “the wild hour, black and

full of thunder” (ch.12), “I heard him thunder” (ch.14), “The returning sense of sight came upon me, red, as if it swam in blood; suspended hearing rushed back loud, like thunder” (ch.16), “his spirit was of vintage too mellow and generous to sour in one thunder-clap” (ch.18), “They were then thundering in a chorus” (ch.20), “he broke upon us like a clap of thunder” (ch.21), “a deep, swollen winter river, thundering in cataract” (ch.23), “Here was the show-trial, so long evaded, come on me like a thunder-clap” (ch.35), “Here roared no utterance of Rome’s thunders” (ch.36), “I might have taken this discovery as a thunder clap” (ch.38), “The carriage thunders past” (ch.39), “The thundering carriage-and-pair” (ch.40), “would he fold the wings whose waft was thunder—the tremor of whose plumes was storm” (ch.42)

しかしながら、第15章、第16章および第34章では*The Professor*で見られたような「絆効果」が認められる。それではさっそくその第15章に入りたい。この章は夏休みを扱っている。女子寄宿学校の教師として働いているルーシーは夏休みに入り、生徒が全員帰省したために、耐えがたいほどの寂寥感にとらわれる。それで、ある夕方のことであったが、われ知らずカトリックの教会に入り、司祭に懺悔しようと試みたのであった。しかし司祭はルーシーが英国人で、プロテスタントであることを理由に、彼女の懺悔を聞くのを断わる。懺悔できずに終わったルーシーは悄然と教会を出て夜のヴィレットを彷徨する。路地を歩きつづけたすえについには道に迷うのであった。彼女には人に道を聞く気力さえ残っていなかった。そうした状況の中、今まで穏やかであった空は、急に荒れだしてくる。北西の風が横殴りに吹いてきた。雨はバケツをひっくり返したように降り、霰さえ降ってきてルーシーの肌を痛く刺す。

If the storm had lulled a little at sunset, it made up now for

lost time. Strong and horizontal thundered the current of the wind from north-west to south-east; it brought rain like spray, and sometimes, a sharp hail like shot: it was cold and pierced me to the vitals. I bent my head to meet it, but it beat me back.

(*Villette*, ch.15)

意識を取り戻したルーシーは15年前イギリスで世話になっていたミセス・ブレトン (Mrs. Bretton) の家で介抱されていることに気付く。*The Professor*の場合のように “Am I in England? Am I at Bretton?” (*Villette*, ch.16) と彼女は呟く。外の天候は “evening began to darken, and the ceaseless blast still blew wild and cold, and the rain streamed on, deluge-like” (*Villette*, ch.16) である。このために彼女は, “I grew weary” (*Villette*, ch.16) になる。しかし, “weary” であるのは悪天候にではなく, “—very weary of my bed” (*Villette*, ch.16) とあるように、ベッド、つまり寝ていることについてである。すなわちシャーロットは、読者にルーシーが悪天候にうんざりして、気分がふさいでいるのだと一瞬思わせておいて、その直後に、いやそうではなく、ミセス・ブレトンに介抱されたために体力が付き、それでベッドで寝ていることがいやになったのだと意表をついたことを言っは、読者をおかつぐのである。シャーロットは案外の食わせ者であったのだ。すっかり元気を取り戻したルーシーはベッドから立ち上がり、階下に降りると、そこにはきわめて故国イギリスの家庭を思わせる調度品がならんでいた。テーブルの上にはイギリス式のお茶の準備が整い、ぴかぴかに光る茶器のセットが親しみをこめて彼女を眺める。するとそこは “Strange to say, old acquaintance were all about me, and ‘auld lang syne’ smiled out of every nook” (*Villette*, ch.16) である。そうした状況下で、幼馴染のグラハム・ブレトン (Graham Bretton) と再会するのであった。グラハムは今ではドクター・ジョン (Dr. John) と呼ばれる医者に成長していた。このように ここでの “thunder” はルーシーにブレトン一家との結び

つきを再開させ、両者の絆を強める働きをしたのである。

第34章に進んで、もう一つの例を考察してみたい。ルーシーは雇い主であるマダム・ベック (Madame Beck) から、彼女の知人のマダム・ワルラヴァン (Madame Walravens) へ誕生祝をもっていくように命じられる。その務めを終えてマダム・ワルラヴァンのサロンを辞そうとし、マダム・ワルラヴァンが背を向けた、ちょうどそのとき、突如雷鳴が轟き稲妻がひらめく。

Just as she turned, a peal of thunder broke, and a flash of lightning blazed broad over salon and boudoir.

(*Villette*, ch.34)

ルーシーは “I hardly liked to go out under this water-spout” と思う。まさしくそのときにマダム・ワルラヴァンのサロンに案内してくれた男性、彼はシラ神父 (Père Silas) であったが、この神父が顔を出し、彼の部屋にルーシーを入れて雨宿りをさせてくれる。この神父から、ポール・エマニュエル (Paul Emanuel) がマダム・ワルラヴァンと召使のアグネス (Agnes)、それにシラ神父自身をこの家に住まわせてくれている恩人であることを聞かされ、さらに “the essence of Emanuel’s nature is—constancy” (*Villette*, ch.34) であることを知らされる。このように “thunder” はルーシーに彼女が思いを寄せるポールという人物の正体を明らかにするための手段となる。そのような重要な役割を “thunder” は演じるわけである。したがって、それが完了した今、“thunder” の存在意義はなくなる。それを証明するかのように、ポールの本質が指摘された直後には

And now the sun broke out pallid and waterish; the rain yet fell, but there was no more tempest; that hot firmament had cloven and poured out its lightnings. A longer delay would scarce leave daylight for my return, so I rose, thanked the father for his hospitality and his tale.

(Villette, ch.34)

となる。

以上の考察から知られるようにシャーロットは、*The Professor*と*Villette*において伝統的、常套的な“thunder”観ではなく、つまり“thunder”を神の声、そしてそれは人の罪をあばき、それを明らかにし、関係者同士の間を壊すというものとしてではなく、むしろそれとは正反対に関係者同士を近づけるという「絆効果」観を読者に提示しているのだ。

このような「絆効果」を雨が出している歌が『万葉集』に見られるので、ここでそれを紹介することにしたい。『万葉集』巻十一¹⁶の2684番には

笠なみと人には言ひて雨つつみ留まりし君が姿し思ほゆ

(『万葉集』巻十一、2684)

とある。つまり、笠がないので人には言ひて我が家に雨宿りして泊まっていったあなたの姿が思い出されます、と歌っているのである。雨が降ったために、笠がないことを理由に男性は女性の家で一夜を過ごし、女性との絆を強めることができたのである。また、その次にあげられている2685番では

妹が門行き過ぎかねつひさかたの雨も降らぬかそをよしにせむ

(『万葉集』巻十一、2685)

とある。あの娘の家の前を通り過ぎることができない。雨でも降ってこないかなあ。それを口実に雨宿りさせてもらおう、と歌うのである。普段であれば厭わしい雨であるが、しかし、娘の家で雨宿りするには都合に働き、雨が二人を近づける絆の役を果たすのである。

これら2編の和歌は、雨が男と女の絆をつなぐ、あるいは強める役割を演じているわけで、同じことをシャーロットの“thunder”も行っているのだ。

¹⁶ テキストは、『万葉集』三、新日本古典文学大系3、佐竹昭広他校注。岩波書店、2002年。

VII 結び

エミリの *Wuthering Heights* の “wuther” という言葉は、この作品の中で次のように説明されている。それによると

“Wuthering” being a significant provincial adjective, descriptive of the atmospheric tumult to which its station is exposed in stormy weather.

(*Wuthering Heights*, vol.1, ch.1)

ブロンテ姉妹の住んでいたハウスには、聖職者のパトリックに見られた、人の罪をあばき、それを明らかにし、警告を発する、伝統的な神の声としての “thunder” もあれば、晩年を酒とアヘンと不倫によって身を持ち崩し、破滅的な人生を送ることになったブランウェルに見られた、死や破滅を強調する “thunder” もあるし、エミリとシャーロットに見られたような登場人物の心象風景を表現する “thunder” もある。しかし、それだけにとどまるのではない。関係者同士を近付ける絆効果を持つさらなる “thunder” も存在するのである。シャーロットは従来、因習的には恐るべきもの、あるいは厭わしいものと考えられていた “thunder” にむしろ長所を見つけ、それに新しい解釈を施したのである。

これらさまざまな “thunder” が、ブロンテ姉妹の時代から150年以上を数えた現代においてもなお鳴り止まずに聞こえてくる。それらは私たちに生きるうえでの警告を発しもするが、それと同時に絆の大切さをも教えてくれている。そのような “thunder” を響かせている “Thundering Heights” がヨークシャのハウスには存在するのである。

参考文献

- Brontë, Anne. *Agnes Grey*. Ed. Hilda Marsden and Robert Inglesfield. Oxford: Clarendon Press, 1988.
- *The Tenant of Wildfell Hall*. Ed. Herbert Rosengarten. Oxford: Clarendon Press, 1992.
- Brontë, Charlotte. *Jane Eyre*. Ed. Jane Jack and Margaret Smith. 1969; Oxford: Clarendon Press, 1975.
- 『ジェイン・エア』上・下。小尾芙佐訳。光文社、2006年。
- *The Letters of Charlotte Brontë*. Vol.1 1829-1847. Ed. Margaret Smith. Oxford: Clarendon Press, 1995.
- *The Professor*. Ed. Margaret Smith and Herbert Rosengarten. Oxford: Clarendon Press, 1987.
- *Shirley*. Ed. Herbert Rosengarten and Margaret Smith. Oxford: Clarendon Press, 1979.
- *Villette*. Ed. Herbert Rosengarten and Margaret Smith. Oxford: Clarendon Press, 1984.
- Brontë, Emily. *Wuthering Heights*. Ed. Hilda Marsden and Ian Jack. Oxford: Clarendon Press, 1976.
- 『嵐が丘』上・下 小野寺健訳。光文社、2010年。
- Brontë, Patrick. *Patrick Brontë: His Collected Works and Life*. Ed. J.Horsfall Turner. Bingley: T. Harrison & Sons, 1898.
- Brontë, Patrick Branwell. *The Poems of Patrick Branwell Brontë*. Ed. Victor A. Neufeldt. New York & London: Garland, 1990.
- Carter, Michael. *Charlotte Brontë's Thunder: The Truth Behind the Brontë Genius*. Amazon: Boomer Publication, 2011.
- De Vries, Ad. *Dictionary of Symbols and Imagery*. Amsterdam: North-Holland, 1974.
- Evans, Ivor H. *Brewer's Dictionary of Phrase and Fable*. Rev. Edition.

London: Cassell, 1981.

Gaskell, Elizabeth. *The Life of Charlotte Brontë*. Ed. Alan Shelston. Harmondsworth: Penguin Books, 1975.

The Holy Bible. Cambridge: Cambridge University Press.

Oxford English Dictionary. Second Edition on CD-ROM (v. 4.0). Oxford: Oxford University Press 2009.

Woolf, Virginia. *The Common Reader*. 1925. Orlando: Harcourt., 1953.

『万葉集』三 新日本古典文学大系3、佐竹昭広他校注。岩波書店、2002年。